
ハートキャッチプリキュア & 仮面ライダー龍騎 鏡の騎士と伝説の戦士

TH

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ハートキャッチプリキュア&仮面ライダー龍騎 鏡の騎士と伝説の戦士

【Nコード】

N8600Y

【作者名】

TH

【あらすじ】

明堂院学園中等部に転校してきた少年・『桐原翼』。転校して運命の再会と出会い、そして鏡の世界・『ミラーワールド』の戦いを巻き込まれていく。4人の伝説の戦士と出会いと砂漠の使徒と13人のライダー、2つの戦いに巻き込まれる。

登場人物

登場人物

桐原翼／仮面ライダー龍騎

札幌から引越してきた明堂院学園中等部2年。つぼみの幼馴染。正義感が強い心やさしい性格。特につぼみには甘い。しかしその反面、自分に自信がない。偶然恭介が落としたカードデッキを拾いひよんなことから鏡の世界・『ミラーワールド』に来てしまい、仮面ライダーになった。龍のモンスター・『ドラッグレッダー』と契約し、『仮面ライダー龍騎』として、そしてライダー同士の戦いを止めるために戦う。

八神恭介／仮面ライダーナイト

明堂院学園高等部2年。ゆりの幼馴染。翼達がライダーになる前から仮面ライダーとして戦っていた。砂漠の使徒と父の仇の『仮面ライダーオーデイン』を倒すのが目的であったが、ゆりと再会し、これ以上の悲しみを味あわせないため、大切な人たちを守るため『仮面ライダーナイト』として戦う。最初は自分が龍騎になろうともう一つのデッキを持ち、ドラッグレッダーを探していた。

日暮京／仮面ライダーリュウガ

翼と同じく転校してきた明堂院学園2年。大らかで前向きな性格。将来の夢はファッションデザイナーになる事。同じファッションデザイナーに目指しているえりかと意気投合する。ミラーワールドから出てきた『ミラーモンスター』を見てしまい、戦いに巻き込んだ。『ドラッグブラッカー』と契約し『仮面ライダーリュウガ』として戦う

草薙夕輝／仮面ライダーゾルダ

明堂院学園2年。1年前に入院していたが、今年になって退院した。いつきの幼馴染。正々堂々とした性格で曲った事は毛嫌いしている。京同様、『ミラーモンスター』を見てしまい、戦いに巻き込んだ。

『マゲナギガ』と契約し、『仮面ライダーゾルダ』として戦う。

プロローグ（前書き）

少し短いです

プロローグ

明堂院学園

そこに一人の少年が校門の前に立っていた。

？「ここが明堂院学園か……」

少年の名前は『桐原翼』。今日から明堂院学園の生徒になるのだ。

翼「友達作れるかな……なんか妙に緊張するな……」

翼がそう考えていたら誰かとぶつかった。

翼「うわ！」

？「きゃ！」

翼とぶつかったのは髪を両方結んでいて、眼鏡を掛けている少女だ。

翼「あつ、ごめん！大丈夫？」

翼は先に立ち上がり少女に手を差し出した。

？「あつ、はい大丈夫です！」

少女は翼の手を掴み、立ちあがった。

翼（あれ？この娘、どこかで……）

？「どうかしましたか？」

翼「あ、いやなんでもないよ。じゃあね」

翼は少女を後にし、校舎へと向かった。

少女（あの人、どこかであつたような……）

翼はまだ気づいていなかった。これは「出会い」ではなく「再会」
だと言っ事を

第1話 友達

翼「校舎に入っただのはいいけど…職員室何処だろ……」

翼はいま、道に迷っていた。最初は間違えて高等部に行ってしまう、偶然翼を見た、眼鏡をかけたロングヘアーの女子生徒と青髪の女子生徒にここは中等部じゃないと教えてもらいなんとか中等部に来た。

翼「どこにあるんだろ…？あの人に聞いてみるか」

翼は偶然見つけた男子生徒を声をかけた。

翼「あのすいません。」

翼に声を掛けられた男子生徒は翼の方に振り向いた。

？「どうしたの？」

翼「職員室何処ですか？俺今日からここに転入してきたんでよく分かんなくなつて」

？「俺も職員室に用があるんだ。一緒に行こうか？」

翼「あ、お願いします」

？「俺、『草薙夕輝』。君は？」

？「俺は『桐原翼』。今年ここに転校して、2年生です」

夕輝「2年？じゃあ俺と同じ学年だね」

翼「えっ？2年だったの？」

夕輝「ああ。ここで会ったのは何かの縁だ。良かったらさ俺と友達にならない？」

翼「えっ！？いいの？ありがとう！ええと…」

夕輝「夕輝でいいよ。」

翼「わかった。じゃあおれも翼でいいよ」

夕輝「じゃあ、改めてよろしくな翼。」

翼「ああ。こちらこそよろしく」

2人は職員室に向かった。途中誰かが声を掛けてきた。

？「なあ、職員室何処か教えてくんねえか？」

2人は声の主に振り向くと居たのは、ブレザーを着ている男子生徒だ。2人はすぐにこの人は転校生だと分かった。

夕輝「転校生？」

？「ああ。俺、『日暮京』。よろしくな！」

夕輝「俺は草薙夕輝。夕輝いいよ」

翼「あ、俺は桐原翼。よろしくね」

こうして翼は転校初日から友達が2人も出来た。それがこれから来る試練を共に乗り越える者同士だと言うことも知らずに

第2話 再会

第2話 再会

翼、京、夕輝「「失礼しました」」

翼と京、夕輝は職員室から出て、校長先生に挨拶して、職員室に出た。

翼「はあ、なんかちょっとホッとした気分だよ。」

京「なあ、夕輝。さっき先生達お前を見て驚いていた人がいたけどなんでだ？」

夕輝「俺は元々この学校の生徒なんだ。去年ちょっと入院してて今年になって退院したんだ」

翼「え、入院してたの？」

夕輝「ああ。入院ライフ経験者として言うけど入院している時つてものすごく暇だからね」

翼「やっぱり、入院中は暇なんだ…」

それからしばらく3人は会話している最中に誰かが声を掛けてきた。「君たちもしかして転校生？」

翼と京は後ろを向くとそこに居たのはショートヘアーで白い制服を着ている生徒と青髪でセミロングの女子生徒だ。

夕輝「俺は転校生じゃないけどね」

夕輝はそう言いながら2人に振り向いた。夕輝を見て2人は驚いた表情になった。

？「えー！もしかして夕輝君！？」

？「退院してたの！？」

夕輝「ああ。2か月前に退院して、一昨日帰国したんだ」

翼「夕輝、この娘達は？」

夕輝「ん？ああごめん。紹介するよ。この娘は幼馴染の『明堂院いつき』でこっちは『来海えりか』だよ」

いつき「夕輝の幼馴染の明堂院いつきです。よろくね」

えりか「来海えりかだよ！よろしくね！」

いつきは礼儀正しく挨拶し、えりかは元気よく挨拶した。

翼「俺は桐原翼。よろしく。」

京「俺は日暮京だ。よろしくな！そして夢はファッションデザイナー
ーだぜ！」

京の言葉を聞いたえりかは即座に反応した。

えりか「ファッションデザイナー！？ファッションデザイナー目指
してるの！？」

京「そうだぜ。」

翼「どうしたの？急に」

夕輝「えりかはこの学校のファッション部の部長なんだ」

京「ファッション部なんてあるのか？じゃあ放課後、来てもいいか
？」

えりか「もちろん！入部大歓迎だよ！」

翼（今日一日で友達4人も出来たよ…この学校やっていけそうだな）
少しだけ会話をしていた5人。その途中夕輝が時計を見るとそろそ
ろ授業の時間だった。

夕輝「あ、もうそろそろ時間だな。じゃあいつき、えりか後でね」
いつき「うん」

えりか「京君！放課後、待ってるね！」

京「おお！」

夕輝「じゃあいつき。またな」
いつき「うん」

翼達はそれぞれの教室へと移動した。

京「じゃあ、俺こっちのクラスだから。じゃあな」

翼「う、うん…」

京と別れた翼は少し心細かった。

翼（はあ…どうしよう…誰か知り合いがいてくれたらな…）

翼が入ろうしている教室は今ホームルームの真っ最中だった。

先生「ーそれから、今日からこのクラスに転入性が入ります。どう

ぞ」

翼「とうとう来たか…」

緊張しながら教室のドアを開けた翼は先生の所まで行き自己紹介した。

翼「今日からこの学校に転校することになりました、桐原翼です。よろしくお願いします」

翼が自己紹介終わると一人の女子生徒があわただしく立ちあがった。

「翼君!？」

翼は女子生徒の方を向いた。翼は今立っている女子生徒に見覚えがあった。結び髪で眼鏡を掛けている少女だ。

翼「つぼみ!？」

えりか「あれ?つぼみ、翼君のこと知ってるの?」

つぼみ「はい。私の幼馴染です。」

えりか「えー!幼馴染だったのー!？」

翼は嬉しくって思わずつぼみの方に行った。

翼「久しぶりだね!元気だった?」

つぼみ「はい!翼君もお元気そうで!」

えりか「ねえねえ。翼君お取り込み中悪いけど、翼君の席はあつちだよ」

翼「あつ、そうだった。ありがとう」

翼はえりかが言われた席へ座った。その同時にさっきまでの不安感が一気になくなった。

第3話 鏡の世界・『ミラーワールド』（前書き）

いよいよ翼はミラーワールドに入ります。

第3話 鏡の世界・『ミラーワールド』

学校が終わり翼とつぼみは2人で下校していた。所がつぼみは翼に『植物園に来てほしい』と言われ、翼は植物園に向かっていた。

翼「それにしても驚いたな。まさかまたつぼみと会えるなんて。」

つぼみ「私もですよ。転校生が翼君だったからビックリしました」

翼「ホントだね。でもまたつぼみに会えて凄くうれしいよ」

つぼみ「私もです！あ、着きましたよ」

2人は植物園に着き、植物園の中に入った。

翼「うわー、花がいっぱいあるね。つぼみは今でも花の科学者を目指してるの？」

つぼみ「はい。花は人を幸せにする物。だから砂漠になっている世界を花を咲かせたいです」

翼「つぼみならきつとなれるよ。ん？」

翼は別の花壇いる男性と女性に目に入った。翼は男性は見覚えはなかったが女性の方は見覚えがあった。学校で校舎を教えてくれた人だった。

つぼみ「翼君どうしたんですか？」

翼「ああ。あの人、俺が迷っている時に校舎を教えてくれた人なんだ。あ、そういえば礼を言い忘れてたんだ。ちよつとあの人と話してくるね」

つぼみ「あ、翼君待つて下さい」

翼は眼鏡の女性のいるところへ歩いて行った。つぼみも翼の後に続いた。

翼「あのすいません」

「あら、あなたは確か今朝の」

翼「桐原翼です。あの時校舎を教えてくれてありがとうございます。」

「ゆり」どういたしまして。」

つぼみ「ゆりさんこんにちは」

「こんにちは。きょうはえりか達はいないのね」

つぼみ「はいえりかはちよつと転校生と一緒にファッション部いていつきは幼馴染と一緒に道場に行ってます。」

翼「え？つぼみこの人と知り合いなの？」

つぼみ「はい。時々この植物園に来ています。紹介しますね。明堂学院学園高等部2年の『月影ゆり』さんです」

ゆり「月影ゆりよ。よろしくね」

翼「あ、はい。よろしくお願いします。」

「ゆり。知り合いか？」

ゆりの後ろに一緒にいた男子高生が声を掛けてきた。

つぼみ「ゆりさん。この人は？」

ゆり「紹介するわ。彼は私の幼馴染の――」

「『八神恭介』だ。」

つぼみ「ゆ、ゆりさんの幼馴染ですか!？」

ゆり「そんなに驚くこと？」

つぼみ「い、いえ！すいません」

翼（なんかクールだなこの人…）

翼はそう思っていたながらゆりと恭介を見ていると、恭介は突然あたりを見回し始めた。それを不思議に思った翼は恭介に声をかけた。

翼「あの、恭介さん。どうしたんですか？」

恭介「いや。なんでもない。ゆり、ちよつと急用思い出したから、俺は失礼するよ。」

ゆり「……わかったわ」

恭介はゆり達を後にし、外へ出た。

つぼみ「何かあったんでしょうか？」

翼「さあ。ん？」

翼は恭介が立っていた場所に黒いケースが落ちているのを気付いた。翼「なんだろこれ？」

翼は黒いケースを拾った同時に何処からか妙な音が鳴り始めた。

キイイイイン

翼（何だこの音…どこから？）

つぼみ「翼君どうしたんですか？」

翼「ごめん。ちよつと行つてくる！」

翼は音の場所を探る為に外に出た。

つぼみ「え、ちよつと翼君！」

翼は植物園から出て、音が鳴っているところを探した。しかし何処も音が鳴っている場所らしきものはなかった。

翼（どこだ…何処から音が…）

翼は探しまわっていると首から妙な感触を感じた。翼は首を触ると首に糸を巻かれていた。そして後ろを向くと糸が出ている場所は鏡の中からだった。

翼「鏡に！？」

すると糸は翼に鏡の中に引つ張り、翼は鏡の中に入った。

翼「うわああああああ！」

翼は鏡の中から飛ばされその拍子で倒れた。

翼「いて…ここは…あれ？いつもと同じだ。」

翼はあたりを見回すと何かが違った。つぼみの家のフラワーショップの看板の字が左方向だった。

翼「どうなってるんだ？」

すると

「キシヤアア」

突然何かの呻き声が聞こえ翼は振り向くと、そこに蜘蛛姿をした怪物が現れた。翼は怪物の姿を見て、恐怖を感じ、腰を抜かしてしまった。

翼（逃げなきゃ…でも、足が…動かない…）

蜘蛛の怪物は翼を近づき、口を大きく開けた。翼は死の覚悟をし、眼を閉じたその時だった。

ガキン！

翼の前に金属音が鳴り翼は眼を開けた。翼の前に居たのは紺色の騎

士が立っていた。

第4話 紺色の騎士（前書き）

今回は長いです。あと、翼が変身するのは龍騎ブランク体です。

第4話 紺色の騎士

（何だあれ？紺色の…騎士？）

「大丈夫か？」

「え？」

「大丈夫なのかって聞いてるんだ」

「あ、はい」

「そうか」

紺色の騎士は蜘蛛の怪物を向き、コウモリの模様の剣の開き、ベルトから一枚のカードを出しそれを剣に入れた。

『ソードベント』

剣から音声が鳴ると紺色の騎士の手に大きな槍が現れた。紺色の騎士はそれを使って怪物と戦い始めた。

「お前、しばらく大人しくしてろ」

紺色の騎士は槍で怪物を刺し、動けなくした。

「グギヤアア…！」

怪物は動こうとしたが槍は深く差しているため動けなくなっていた。

「これで話せるな。おい、お前」

「はい？」

「おまえ、『アドベントデッキ』を持つてるのか？」

「『アドベントデッキ』？なんですかそれ？」

「さっき俺が落とした物だ。植物園で黒いケースが落ちてあったろ？」

「植物園？あ、もしかして恭介さんですか！？」

「ああ。それで持っているのか？今俺が付いている奴と同じ形をしている奴だ。」

「え…と、あ、あつた」

翼はポケットに入れてあったデッキを出し、恭介に見せた。

「持ってたか。お前運がいいな。それを使って変身しろ。」

「変身？どうやって？」

「デッキを向けるようにするんだ。それと早くしろ。あいつがもうすぐしたら立ち上がる。」

翼は恭介の言うとおりにデッキを向けるように出した。するとどこからかベルトが現れ、翼の腰に装着した。そして持って合ったデッキをベルトに装填した。すると、翼の周りに騎士の残像が現れ、翼と重なると、翼の姿が黒い騎士の姿になった。

「よし。変身したな。」

「で、その後どうするんですか？」

「そのままいろ。」

「ええ！？それじゃあ、変身の意味がないじゃないですか！？」

「その状態では無理だ。ブランク体は弱すぎる。」

恭介は翼を後にし、蜘蛛の怪物とまた闘い始めた。

（引っ込んでろって言われても…少しでも良いからあの人の力になるう。）

翼はデッキから一枚のカードを取り出し、左腕に装着しているガンレットに入れた。

『ソードベント』

ガンレットから音声が鳴ると、空から細長い剣が落ちてきて、地面に指した。

「うわ…何所から来たんだ？」

翼は少し戸惑いながら剣を取った。

「でも、これであいつを…うおおおおおおおお！」

翼は剣を構え、まっすぐ恭介を通りすぎ、怪物へと向かった。

「待てお前！」

恭介が止める前に翼は剣で怪物を斬った。

バキィ！

しかし斬ったのは怪物ではなく翼が持ってた剣だった。

「ええええ！？折れたーーーー！！」

恭介は翼の肩を鷲掴みにし、強引に後ろへ引っ張った。

「うわ！」

「下がってろって言っただろ！」

「でも…ちょっと役に立とうと…」

「その状態は弱いつて言っただろ…！もういい！後で話ししてやる」

恭介はまたデッキからカードを出し、剣に入れた。

『ファイナルベント』

音声が鳴ると何所からか巨大なコウモリが現れた。コウモリは恭介に近づくとコウモリはマントに変形した。

「はっ！」

恭介はジャンプするとマントは全身に包み、ドリル状の回転を始め、蜘蛛の怪物に向かった。

「くらえ！飛翔斬！！」

蜘蛛の怪物は逃げようとしたが、それ以上にスピードが速く、飛翔斬を直撃した。飛翔斬を直撃した蜘蛛の怪物は爆破した。

ドーン！

「す…すごい…」

「ふう…まさかここにも『ミラーモンスター』現れるとはな」

「あの…恭介さん。さっきの怪物はいつたいなんですか？」

「あれはな…！危ない…！」

恭介は何かを感じたのか翼を押した。その同時に2人の間に火球が地面に爆発した。

「こ、今度は何！？」

「とうとう現われたか…龍のモンスター・『ドラッグレッダー』！」

翼は恭介が空を見ていたのを気付き、翼も上を見た。すると空にいたのは巨大な赤い龍だった。

「なんだ…あの赤い龍…」

第4話 紺色の騎士（後書き）

ついにドラッグレッダーの登場です！もうすぐ契約をします！お楽しみ！！

第5話 『ミラーモンスター』と『仮面ライダー』（前書き）

今回は長いです。

第5話 『ミラーモンスター』と『仮面ライダー』

「なんだ…あの龍…」

翼は突如現れた赤い龍を見つめていた。しかし龍は容赦なく2人に火球を連続で攻撃した。

ドーン！ドーン！ドーン！

「うわああああ！」

「くっ！ここまじやまずい！逃げるぞ！」

「に、逃げるってどうやってですか！？」

「鏡に入るんだ！変身していれば鏡を出入りできる！！急げ！」

恭介はそう言いながら、『フェアリードロップ』のガラスの中に入った。

「あ、ちよつと待ってーイテ！」

翼も鏡に入ろうとしたが鏡に入れず、ゴツンとぶつかった。

「どうして入れないんだ！？変身すれば入れるんじゃない？」

「自分が入った場所以外は入れないぞ。」

「それを早く行ってください！！えーと…俺が入った場所は、えーと…」

翼は自分が鏡に入った場所を思い出そうとした。

（えーと、最初は植物園に出て音の場所を探して、それから…『HANASAKIフラワーSHOP』に立ち止まって、それからここに来て…あれ？ HANASAKIフラワーSHOP？）

翼はHANASAKIフラワーSHOPを見た。翼がミラーワールドの外から来たのはHANASAKIフラワーSHOPだった。

「そうか！ここだ！！」

翼はいろいろ考えている時、赤い龍が翼に居たのを気付いた。

「ギャオオオオオ！」

「うわ！見つけた！」

翼はすぐに鏡の中に入り、外に出た。翼が変身していた鎧は鏡が割

れたかのように解除した。

「はあ…あともう少ししたらあいつにやられたかも……」

「お前、つくづく運がいいな。」

突然翼の後ろに声が聞こえ、後ろを向いた。そこに居たのは恭介だった。

「恭介さん！！あの怪物は何ですか！？それとあの龍は言ったなんですか！！」

翼は気が動転しているのか恭介に質問攻めをした。しかし恭介は動じず、ため息をした。

「落ち着け。話しをしてやる。家に来い」

恭介は翼に手を差し出し、翼はそれを掴み立ちあがった。翼は恭介に案内で恭介の家に向かった。

「あの…どうして恭介さんの家に行くんですか？」

「あれを他の人に聞かせたくないからだ。」

「はあ……」

2人はしばらく無言で歩いた。歩いて1分後、恭介の家に着いた。

ちなみに恭介の家は一軒家だった。恭介はドアのカギを開け、翼に

「入れ」と言った。翼は言うとおりに恭介の家に入った。

「そこに座れ。」

翼は恭介が指差しているソファを座った。恭介は台所に行き冷蔵庫の中に入ってあった缶ジュースを翼に渡し、恭介も近くにあった椅子に座った。

「じゃあ、質問しろ。答えてやる。」

「えっと、さっき俺達がいた場所って何ですか？」

「俺達がいた場所は鏡の世界・『ミラーワールド』だ。」

「『ミラーワールド』？」

「『ミラーワールド』はその名の通り、鏡の世界だ。しかしあそこは俺達人間が本来いるべきではない世界だ。普通の人間が入ると二度と出て来れず、死が待っている。」

「でも、俺達死なずに済みましたよね？」

「それは俺とお前が『仮面ライダー』に変身してたからだ。」

「『仮面ライダー』？なんですかそれ？」

「人間が唯一『ミラーワールド』に行けるの行ける者だ。この『アドベントデッキ』を使って、変身してな。」

恭介はさっき持つて合った、『アドベントデッキ』を翼に見せた。

「そうだったんだ…じゃあ、さっき俺に『ミラーワールド』に入らせた奴は何ですか？」

「あれは『ミラーワールド』に生息する怪物・『ミラーモンスター』だ。」

「『ミラーモンスター』…あれってやっぱり人を襲うんですか？」

「当たり前だ。『ミラーモンスター』は人間を喰って、自分を強化するんだ。」

「うわ…じゃあ、恭介さんが呼んだあのコウモリは？」

「『ダークウイング』か。あいつも同じモンスターだが、俺は人間じゃなくモンスターの生命エネルギーを食わせてる。それもモンスターの強化の元だからな。」

「なるほど…じゃあ、もう一つ質問しますけど、どうして俺だけモンスターがいないんですか？」

「それはお前はモンスターに契約をしていないからだ。」

「契約？」

「ライダーはモンスターに契約するとそのライダーに力が与えられる。ブランク体はそれ以下に弱い。だからお前がもし闘うことになったら、モンスターと契約をして変身するんだ。」

「モンスターと契約ってどうやってやるんですか？」

恭介は翼が持つてあるカードケースを取り、入ってあったカードを全部出した。そしてその中の何も描かれていないカードを出した。

「この何も描かれていないカードをモンスターに向けるんだ。そうすればモンスターと契約が成功し、お前はブランク体ではなくライダーとして覚醒する。まあ、お前が戦う勇気があればの話だな。」

「戦う勇気って、恭介さんは他のライダーの仲間はいなんですか？」

「ああ、2人いたが今はここにいない。しかしいずれここに来るだろう。で、お前は戦う勇気があるか？」

「え、えっと…それは…」

「ああ、言わなくてもいい。強制はしない。無理なら無理って言えばいい…。決断が決めるまでデツキは俺が預かる。今日はもう帰れ。」

「はい…」

翼は恭介にデツキを預け、恭介の家を後にした。外を出て翼はつばみの植物園に鞆を忘れていたのを気付き、植物園へ戻った。植物園に戻るとつばみが翼の所へ走ってきた。

「つ、翼君！どこに行ってたんですか！？ずっと探してたんですよ！！！」

「あ、ご、ごめんね。ちょっと音の場所を探したら道に迷って」「道に迷ったって問題ではないですよ！最近行方不明者が多発しているんですからもし翼君が行方不明になったら、私…私…」

「だ、大丈夫だよ！だって俺、行方不明になってないし、今ここにいるよ！ね！だから泣かないで！！！」

翼は今でも泣きそうなたつばみを必死でなだめた。

「つばみ、落ち着きなよ。見ての通り翼君は戻ってきたんだし。」

つばみの後ろからひよっこりとえりかの顔が出てきた。そして翼は花壇のを見ると京達も来ていた。

「みんな！来てたんだ！」

「よ、翼！」

「やっと戻ってきたか。翼が戻ってくるまでつばみは植物園に行きた来たりしてたんだよ？」

「それにしても翼君ってつばみが泣きそうになるとかなり慌てるんだね。もしかして翼君ってつばみのこと好きなの？」

「な、ななな何言ってるのえりか！？（この娘、思ったこと言うタイプか！？）」

えりかの突然の爆弾発言を聞いた翼は顔を真っ赤になった。つばみ

もそれと同時に顔が真っ赤になった。

「え、え、え、えりか！変なこと言わないでください！」

「えー！2人ともそういう関係なのー！」

えりかの発言と2人の反応を見たいつきも興味津々で聞いてきた。

「違うつていつき！俺達はただの幼馴染だよー！」

「そ、そうです！ 幼馴染ですよー！」

それから翼とつばみはしばらくえりか達にからかわれた。そして、やっと納まり翼は家へ帰った。家に帰った翼は部屋へ行き恭介の言ったことと、つばみが言ったことを考えていた。

『『ミラーモンスター』は人間を喰って、自分を強化するんだ。』

『最近行方不明者が多発しているんですから』

（恭介さんが言っていた『ミラーモンスター』……つばみが言っていた行方不明者多発……これってあのモンスター達の仕業なのかな……もし、それが本当だったらつばみ達も巻き込まれるのか……それは嫌だ！でも、戦うのは怖い……でも恭介さんはそんな奴らを怖がらず戦ってた……つばみ達を守りたい。でも、怖い……どうすればいいんだ……！）

翼はつばみ達を巻き込みたくない思いと戦いという2つの恐怖を感じた。

同じころ恭介は翼が持って合ったデッキを見ながら、携帯で誰かと電話していた。

『今日会った人が巻き込まれたの？』

「ああ。俺の考えではあいつは断るだろう。まあ俺はの方がいいと思うがな。」

『ごめんなさいね……私たちもこっちの用を早くに片づけることができたらすぐそっちへ行けるのに……』

「別にいいさ。それに幸いにもまだ『奴ら』がここに来ていないよ。うだしな。その間、他のライダーを探して、仲間を集めるよ。それに、父さんの無念も晴らしたいしな。」

『そう……あなたがそう言うなら良いけど、もし片付いたらすぐにそ

「うちへ向かうからね」

「ああ。」

『それまで……生きるのよ……』

「ああ、わかってる。俺は死なないよ。そっちも死ぬなよ」
『ええ』

恭介は携帯の電話を切り、またデツキを見つめた。

「絶対に生き残る……例えどんな奴が現れようとも……」

第6話 契約と赤き龍の騎士

翌日。翼は昨日の出来事であまり眠れず、鏡をなんども気になっていた。またあのドラゴンが狙ってくるのかもしれないからだ。「また、あいつが来るのかな…その時は逃げようかな…でも逃げたらつばみが…あー！どうすればいいんだよ！！」

翼は睡眠不足とつばみ達や他の人たちの事でイライラしていた。

「何イライラしてるんだ俺は…でも、どうすればいいんだ…戦うべきなのか…」

翼があれこれ考えていると、突然昨日の音が流れた。

キイイイイン

「！（これは昨日の！）あっちからだ！！」

翼は音の場所へ急ぐと鏡の中に昨日と同じのモンスターいた。

「あれは昨日恭介さんが倒した奴！でも何で…」

「『デイスパイダー・リボーン』か」

翼の後ろに恭介がいた。

「恭介さん！」

「あれから決断は決めたか？」

「え？決断？」

「ライダーとして戦う決断だ。忘れたのか？」

「そ、それは…」

翼は少し迷ったがすぐに恭介に言った。

「俺…どうすればいいのかわからないです。もし、負けたら死ぬかもしれない、でも戦わなかったらつばみや皆が危ない…どうすればいいのかわからないんです…」

翼の様子をしばらく見ていた恭介は口を開いた。

「桐原…お前は逃げてるだけだ。」

「！お、俺は逃げていません！！確かに俺はあなたよりは弱いし、怖がりだしそれに…」

「それが逃げてるってことだ。お前は自分の性格を意識しすぎている。お前、変えようと思わなかったのか？」

「え？」

「昨日は強制じゃないって言ったが、これだけは言っておく。人間は誰でも恐怖はある。だが、人間はそれを受け入れようとはしないでも俺は戦い続けた。今までも…これからも」

恭介は鏡のほうに歩き、鏡の前に立った。そしてポケットからデッキを出して、鏡の前に向けた。すると『Vバツクル』が現れ腰に装着した。

「変身！」

恭介はデッキをバツクルに装填すると、京すの周りに騎士の残像が現れ、恭介に重なると恭介は『仮面ライダーナイト』に変身した。

「桐原。お前の決断はもうわかった。昨日の事とライダーの事は忘れる。」

ナイトは翼に言い残し、ミラーワールドへ入った。ミラーワールドに入ったナイトは『ディスプレイダー・リボン』と戦い始めた。

「人間は誰でも恐怖はある…でも、恭介さんは何も怖がってない…普通に戦ってる」

「それはあなたの大間違いよ」

背後から声が聞こえ、翼はギョっとし後ろを向いた。そこに居たのはゆりだった。

「ゆりさん。どうしてここに？」

「恭介が突然走って行ってたから、探してたのよ。やはりあれだったのね。」

ゆりは翼にしか見えないナイトとモンスターの戦いを見ていた。

「いまでもライダーとして闘っているのね。」

「ゆりさん、恭介がライダーだってこと知ってたんですか!？」

「知ってたわ。彼がライダーとして戦っていたのはちょうどあなたぐらいの時よ。」

「中2の時からですか!？」

「恭介は自分のお父さんに受け継がれてライダーになったのよ。」

「恭介さんのお父さん？あ、そういえばゆりさん、さっき大間違いつて言つてましたけど、どういう意味ですか？」

「貴方が見ている恭介の事が大間違いつてことよ」

「どういうことですか？」

「きょうすけは、昔はライダーではない普通の人間だったの。だけどある日、モンスターにミラーワールドに連れて行かれたのよ。その時、恭介のお父さんが助けに行ったのよ。だけど、戦っている時に恭介は他のモンスターに襲われそうになって、恭介のお父さんは恭介を庇つたのよ。」

「庇つたつて…それで恭介のお父さんは？」

「ミラーワールドに出れなくなつて亡くなつたわ…」

「亡くなつた…」

恭介はゆりの言葉に驚き、言葉に出なかった。

「それ以来恭介は、お父さんの無念を晴らすために今でも戦い続けているわ。死の恐怖と戦いながらね」

「死の恐怖？あの人が恐怖と戦っているんですか？」

「そうよ。彼は今でも恐怖を感じているのよ。負けたら父親と同じ運命になる。だけど彼はモンスターから人々を守る為に闘っているのよ。」

翼はゆりの言つたことを今でも信じられなかった。恭介がそんなに恐怖を感じ続けているのを。

「恭介さん……」

「それで、どうするの？あなたの決断は？」

「え？」

「戦う決断よ。まだちゃんと言つてなかったでしょ？」

「俺は…」

翼は心の中で決心をした。恭介と共に恐怖を挑もうと。そして、皆を守ろうと。

「俺、戦います！恭介さんの為に！皆を守る為に！！」

ゆりは翼の眼を見た。今の翼の眼は生半可の目ではなく、覚悟がある、意思の目立った。ゆりは制服のポケットに手を入れると中から翼が持つて合ったデッキを出した。

「え？ゆりさんが何でデッキを？」

「恭介から預かったのよ。なくしたら困るからってね。」

ゆりはデッキから一枚のカードを翼に渡した。

「さあ、契約をしなさい。あの龍に」

「あの龍？」

ゆりは別の方の鏡を向いた。翼も向くと、そこに昨日の『ドラッグレッダー』がこっちを見ていた。

「え！？あの『ドラッグレッダー』に！？」

「そうよ。あの龍は恭介がずっと狙い続けていたモンスターよ。カードをモンスターに向けるのよ。」

「恭介さんが狙っていたモンスター……」

翼はカードを『ドラッグレッダー』に向けた。

「ドラッグレッダー！俺と契約だ……！」

『ギャアアアアア！』

ドラッグレッダーは雄叫びを上げ、カードへと向かい、ドラッグレッダーはカードの中に入った。

「え？これって……」

「契約成功よ。さあ、変身しなさい。」

翼は頷き、鏡の前に立ち、デッキを鏡に向けた。そうすると、恭介と同じくVバックルが現れ、装着した。

「変身……！」

翼はデッキに装填すると、騎士の残像が現れ、翼に重なると、翼の姿は赤き騎士のライダー・『仮面ライダー龍騎』になった。

第6話 契約と赤き龍の騎士（後書き）

お待たせしました！！遂に翼は仮面ライダーに覚醒しました！！

第7話 共闘！2人の騎士（前書き）

ついに翼が龍騎に変身！！

第7話 共闘！2人の騎士

龍騎に変身した翼は鏡に映る自分の姿を見て驚いていた。

「これが…契約したライダーの姿…」

「なにしてるの？早く行きなさい」

「え？ああ、はい！ゆりさん。ありがとう」

「礼を言うのは後にしなさい。恭介を頼んだわよ」

「はい。」

翼は鏡の中に入りミラーワールドへ入った。中に入るとそこに一台のバイクがあった。

「何だこのバイク…？もしかしてこれに乗るのか…中学生が乗ったら確実に捕まるなって今はそんな事を言っている場合じゃないな」
龍騎はバイクに乗りエンジンを掛け、ディメンションホールへ入った。

（待つててください！恭介さん！！）

その頃ナイトは『デイスパイダー・リボーン』に苦戦していた。

「ちっ！こいつ、前より強くなってる！！」

ナイトはダークバイザーを構え、立ちあがった。しかしデイスパイダー・リボーンは胸から鋭いトゲを飛ばし、ナイトの右手に直撃した。その拍子に、ナイトのダークバイザーがはじかれた。

「しまった！」

ナイトはダークバイザーを取ろうとしたが、デイスパイダー・リボーンは口から糸を出し、ナイトに拘束した。糸を振り解こうとしたが、糸は頑丈だったため解かなかった。デイスパイダー・リボーンは拘束されたナイトを食べようと近付き始めた。

「くそ…！解けない！！」

ちょうどその頃龍騎はディメンションホールから出て、ミラーワールドに着いた。

「ふう…やっと着いた…一時はどうなるかと思った…」

龍騎はナイトがどこにいるのかあたりを見回した。すると丁度ナイトがデイスパイダー・リボーンに拘束され、今でも喰われるところだった。

「恭介さんが！」

龍騎は恭介のもとへ行こうとすると足もとにナイトのダークバイザーが落ちていた。

「これは…たしか、恭介さんの」

龍騎はダークバイザーを拾い、ダークバイザーを構え、デイスパイダー・リボーンへと走った。

「うおおおおおおおお！」

ガキイ！

龍騎はダークバイザーでデイスパイダー・リボーンを斬った。デイスパイダー・リボーンは突然の攻撃で倒れた。

（なんだ奴は？新手的ライダーか？）

龍騎はすぐさまナイトが縛られていた糸斬り、緩くなった糸を解いた。

「大丈夫ですか！？恭介さん！」

「その声…桐原か！？」

「よかったー。なんとか間に合った。」

「お前、あの龍に契約をしたのか？」

「はい。恭介さん。俺、戦います。つぼみや友達や人々の為、そして自分の為に。俺も恭介さんと一緒に恐怖と戦いますー！」

「一緒に恐怖と戦うって…」

恭介は自分がきた鏡を見た。そこにゆりが立っていた。ゆりは見えたのかコクと頷いた。

（一人で抱え込むなってわけか…）

「恭介さん」

「ん？なんだ？」

「俺と一緒に闘ってくれませんか？」

「……覚悟があるのか？」

「あります。その為にライダーに変身しました。」

「そうか…」

すると翼は右手を恭介に差し出した。

「なんだ？」

「よろしくつてことです。あ、あとこれも」

恭介は仮面の中で微笑しながら翼と握手した。握手し終わり、龍騎は左手に持つてあった『ダークバイザー』をナイトに渡し、ナイトは受け取った。龍騎とナイトはデッキからカードを出し、龍騎は『ドラグバイザー』、ナイトは『ダークバイザー』に入れた。

『『ソードベント』』

バイザーから音声になると、龍騎の右手に『ドラグセイバー』、ナイトの右手に『ウイングランサー』が現れた。

「行くぞ。『翼』」

「ハイ！つて今名前呼びませんでしたか？」

「共に闘う仲間…だろ？」

恭介の言葉を聞いた翼は嬉しくなり、仮面の中で満面の笑みをしていた。

「ハイ！」

「キシヤアアアア！」

デイスパイダー・リボーンは胸からトゲを飛ばしてきた。ナイトは横にかわし、龍騎は高くジャンプし、そのまま言つてバク転し、『ドラグセイバー』でデイスパイダー・リボーンを斬り付け、回し蹴りを繰り返した。ナイトはその隙を見逃さず、『ウイングランサー』でデイスパイダー・リボーンの腹部を刺した。

「キシヤアアア！」

「まだまだ！」

龍騎は走り出し、デイスパイダー・リボーンに『ドラグセイバー』で連続で斬った。

「なかなかやるじゃないか…」

ナイトは翼の戦いを見ながらまたカードを出し、バイザーを入れた。

した。

「終わったな。」

「やりましたね！恭介さん！」

「ああ。ん？」

ナイトは自分の右腕を見た。右腕は砂のようになっていた。

「なにこれ？」

「時間切れだ。早く戻るぞ。」

「時間切れ？」

「ライダーは長く入られるが、時間もある。急ぐぞ。」

「わかりました」

2人は元来た鏡へ向かい、鏡に吸い込まれた。鏡から出た、2人はデッキを取り変身を解除した。

「ふう…今度は何も起きずに普通に戻れた…恭介さん、さっき時間切れって言うてましたけど、どういう意味ですか？」

「ライダーになったらミラーワールドに長く入られるが、時間が切れると変身が徐々解いてしまう。だからなるべく早くモンスターを倒すのが良い。」

「ライダーでも時間があるんだ…」

「そんなことより、翼。」

「はい？」

「これからもライダーとして、共に闘う者として、よろしく頼む。」

「はい！俺もライダーとして、全力戦っていきます！」

「そうか…」

恭介は翼の覚悟を見て、少しだけ微笑んでいた。

「じゃあ、俺はこの辺で失礼する。」

恭介は翼を残し、教室へと向かった。残った翼はデッキを出し、デッキを見て、そして鏡を見た。そこにはドラグレッダーがこっちにみつめていた。

「ドラグレッダー…これからもよろしく」

ドラグレッダーは翼をじっと見つめていた。おそらくドラグレッダー

―もよろしくと言っている、と翼は心の中でそう思った。

「さて。俺も教室へ行こう！」

翼はデッキを制服のポケットに入れ、教室へと向かった。

―ついにライダーになった翼。彼の壮絶な戦いは今、始まる―

第8話 プリキュアとの出会い

次の日の学校

翼は仮面ライダーになってから校内や街中を回るようになった。恭介からいつ何時でもモンスターが現れるかわからないため鏡やガラスなどを隈なく回れと言われたのだ。

「えーと、こちら辺はあまり鏡やガラスはないから大丈夫かな？」

「翼。」

翼は声をかけられた人の方に向いた。声をかけたのは夕輝だった。

「夕輝！どうしたの？こんな所で？」

「お前こそ何してるんだ？街中歩き回って」

「あ、えっと…散歩だよ。夕輝こそ何してるの？」

「俺も散歩。久々の希望ヶ丘だからな」

「そうか、夕輝は元々ここに住んでたんだったね。」

「それで散歩の後、いつきの家に行こうと思ってるけどお前も行くか？」

「いつきの家？（もう見回りは済んだしいいよね）うん。行く」

2人はいつきの家へと向かった。

その頃恭介はこの前、電話をしていた相手とまた電話をしていた。

「そう。また仲間が出来たのね。それでその人は何のライダーなの？」

「龍騎だ。ドラグレッダーと契約をしたライダーだ。」

「ドラグレッダーに？恭介、先越されたわね。龍騎はあなたがなるはずだったのに」

「別にいいさ。俺はナイトの時の方が戦いやすい。」

「そう、てつきり悔しがってるんじゃないのかと思ってたわ」

「別に……それよりも『姉さん』。そっちから電話をしてるのは悪い知らせか？」

「流石鋭いわね恭介。そうよ…『奴ら』がまた活動し始めたの。」

「また奴らか…俺がここにいるのを気付いたのか？」

『いいえ。でも、いずれはバレるわ。もし奴らがあなたがそっちに
いるのを気付いたら私たちも向かうわ。』

「わかった。それじゃあ」

恭介は携帯の電話を切った。

「とうとう奴らも活動し始めたか…翼にもいずれは話さないとな」
その頃、翼と夕輝はいつきの家に着いた。

「デッカ…ここがいつきの家？」

「ああ。あいつの家は道場なんだ。俺も昔、この道場に入ってたんだ。」

「へえ…退院したらまたやろうとかしないの？」

「もうやんないよ…医者にもするなって言われたんだ」

「そうなんだ…」

翼と夕輝は門に入り、玄関へと向かい、チャイムを鳴らした。玄関
のドアが開くとそこに女性が現れた。おそらくいつきの母親だろう。

「あら、夕輝君。いらっしやい」

「こんにちは。いつきはいますか？」

「いつきはいま稽古しているよ。よかったら見に行ったらどうかしら？きつといつきも喜ぶよ」

「はい。じゃあ、見学してきます。翼も一緒にどう？」

「あ、じゃあ、おれも行くかな」

2人はいつきがいる道場へ向かい、中へ入った。ちょうどいつきが
組み手をしているところだった。

「はっ！やあああ！」

「すごい…なんかいつきかっこいい」

「流石だねいつきは。」

翼と夕輝はしばらくいつきの組み手を見ていた。すると誰かが翼に
目隠しされた。

「うわああ！？」

「だーれだ？」

「えりか！翼君を驚かせちゃダメじゃないですか！」

「コラつぼみ！なんでバラすのよー！」

「ちよつとえりか、俺を悪戯するの止めてよ！」

「えーいいじゃん。あたしたちは友達でしょ？」

「友達でもしちゃダメなこともあるよ」

「はい」

それから翼達はいつきの組み手をしばらく見ていた。いつきの稽古は終わり、翼達はいつきの部屋に集まっていた。

「いつきのさつきのあれカッコよかったね！」

「いつきは生徒達から憧れていますからね！」

「そうだよね、だってつぼみはずっと前いつきに惚れてたからね」

「え！？」

えりかの言葉を聞いた翼は少しショックした顔になり、夕輝は青ざめた表情になった。

「つ、つぼみ…お前ってそっちの方か？」

（つぼみ…いつきの事が好きだったなんて…）

「えりか！あの時は私はいつきが『女の子』だってわからなかったからですよ！！」

「アハハ…」

「なんだ…てつきりそっちの方かと思った…」

「え？女の子？」

「なんだ翼、気づかなかったのか？いつきは女だ。」

「えー…！…！…？そうなの！？」

「分かんなかったのかよ…しかもつぼみもか」

夕輝の発言に驚きを隠しきれず翼は大声を上げた。夕輝は半分呆れ顔で翼とつぼみ見ていた。

「だ、だって男装しているからてつきり…でも何で男装なんかしてるの？」

「僕の兄が病弱で、明堂院流の跡継ぎが出来なくてだから僕が跡継ぎをしようとしたんだ。でも、僕は可愛いものも好きだったから色

々悩んでたんだ。その時につばみやえりかのおかげで心に余裕が出来たんだ」

「へえ…（つばみ…ここに転校してからいろんな人に助けてるんだ…つばみも変わったな…）」

「ねえ、夕輝君。夕輝君もいつきと同じ道場何だよね？戻ろうとは思わないの？」

「あ、いや…医者にもう出来ないって言われたんだ…」

夕輝の言葉を聞きたいいつきは少し疑問な表情になった。

「え？でも夕輝。もう出来るぐらい体は大丈夫って夕輝のお母さんが言ってたけど？」

それを聞いた夕輝は驚いた表情になった。

「な、なに言ってるんだ？母さんの勘違いだろ？」

「夕輝？」

夕輝の突然の異変に少し驚いた翼達。その態度を見て翼は気付いた。夕輝はさっき翼に言った事はウソだったのだ。

「夕輝…もしかして本当は明堂院流に戻りたいの？」

翼の質問に流石に参ったのか夕輝は黙った。しばらくして夕輝はやつと口を開いた。

「……無理だよ」

「なんで？医者が良いって言ってるんなら戻ればいいじゃん」

「…俺はもう…昔みたいに強くはない…もう完全に弱くなってる…いまから戻っても、もう遅いんだ」

「そんな…せつかくまた出来るのに」

「俺が病気にならなければずっと強かったんだ……ごめん。暗い話したな。帰るよ」

夕輝は早歩きでいつきの部屋に出た。

「夕輝まって！」

いつきは夕輝の後を追うためつばみ達を後にし、部屋から出た。

「ど、どうしましょうえりか！」

「どうしようって言われても…」

「と、とにかく俺達も追おう！」

翼達もいつきの部屋に出て、2人の後を追った。

いつきの家から出た夕輝は公園まで歩き、公園のベンチに座った。

「なんで俺…病気なんかになったんだよ…病気さえならなければ俺はずっと強く居られたのに…」

夕輝は鞆を開け、中に入っであっあ明堂院流の道着を出した。夕輝は発病するまで今まで一生懸命けいこをしていたことを思い出した。しかし発病したせいで今は全く強くなかった。しかし翼が言ったこともあり明堂院流に戻りたいのは確かである。しかし今の自分は昔見たいに強くはない。この2つの想いが重なってしまい、複雑な気持ちになった。

「もう、昔に戻れないな…俺は…弱いな。あの時の約束も果たせないのか…」

夕輝は今までのブランクなどで自暴自棄になったその時だった。

「フン、そんなもの、全く美しくないね」

突然声を掛けられ夕輝は顔を上げるとそこには青い長髪の男が立っていた。

「だ、誰ですか!？」

「僕は『砂漠の使徒』の幹部・『コブラージャ』。君の『心の花』、美しく枯れている」

「こ、『心の花』?何言って—」

「心の花よ出てくるいい!」

夕輝はクモジャキーが言っていることを疑問を思っている途中にクモジャキーは引き抜いた剣から赤い光を発し、夕輝は光に包み込んだ。

「うわあああああ!」

光が弱くなるとそこには夕輝の『心の花』と夕輝本人を閉じ込めたクリスタルが現れた。クモジャキーは夕輝本人が入っている水晶玉

を外し、捨てた。

「さてと…ん？」

クモジャキーは偶然落ちてあつた道着を目に入つた。

「道着か。暑苦しいのは嫌いけど、しょうがない」

クモジャキーは夕輝は道着を取つた。

「デザトリアンのお出ましだ！」

「うおおおおお！」

その頃つぼみ達は夕輝を探していた。

「夕輝ー！ー！」

「夕輝くーんどどこですかー！」

「いつきが心配してるよー！」

「夕輝…もう帰つたのかな…」

「そうですね…もうこんな時間ですし…！」
すると

「うおおおおお！」

つぼみ達は振り向くとそこにデザトリアンが暴れていた

「デザトリアン！」

「もう！何でこんな時に現われるのよ！」

「…大変ですう！／ですっ！／でしゅ！」

つぼみ達は上を向くとつぼみ達の仲間の妖精のシプレ、コフレ、ポプリがこつちに飛んできた。

「心の花を奪われたのは夕輝君でしゅ！」

「何だつて！？」

いつきは珍しくかなり動揺していた。いつきはポプリが持つてあつた水晶玉を取り、それを見た。中では夕輝がかなり苦しんでいた。

「3人とも変身するですっ！」

3人は頷き、つぼみとえりかは『ココロパヒューム』、いつきは『シャイニーパヒューム』を出した。

「…プリキュアの種いくですう／ですっ／でしゅ！」

「…プリキュアオーブンマイハート！」

3人はプリキュアの種をパヒュームに付け、3人は光に包み込み変身した。

「大地に咲く一輪の花！キュアブロッサム！」

「海風に揺れる一輪の花！キュアマリン！」

「日の光浴びる一輪の花！キュアサンシャイン！」

「ハートキャッチプリキュア！」」

3人は決めポーズを決め、デザトリアンと戦い始めた。そして同じころ翼もデザトリアンを見ていた。

「何だあれ！？ミラーモンスターか？」

しかし夕輝を探している途中にミラーモンスターの前兆の音を聞こえなかったからすぐにモンスターじゃないと理解した。しかし翼の心の中にあの怪物を倒さないといけないと感じた。

「やるしかないか……」

翼はデッキを出し、デザトリアンの方へを向けた。するとデッキから赤い電流が走り、電流は翼の腰に流すと、ベルトが現われた。

「変身！」

翼はデッキに装填し、龍騎に変身した。

「よし…行こう！」

龍騎はデザトリアンの所へと走った。

その頃ブロッサム達はデザトリアンと戦っていた。だが、このデザトリアンはかなり手強いのか苦戦していた。

「このデトリアンかなり強いです…」

「なんであんなに強いのか…あんなの反則だよ…」

「きっと…夕輝だからだ。夕輝も私と同じ明堂院流の使い手。だからあのデザトリアンも…」

「うつつ…俺は…俺はどうすればいいんだ…」

突然デザトリアンが頭を抱え大声を出した。

「俺は…また明堂院流に戻りたい！でも、今の俺は昔みたいに強くない…もう何をどうすればいいのかわからないよ…」

「夕輝君…やっぱり、本当は」

「1年間のブランクで…」

「夕輝……」

「はあ…全く、なんて暑苦しすぎなんだ…そんなのは辞めればいいものを…この世は美しくなければ意味がない！」

コブラー ज्याの夕輝への侮辱を聞いた3人はコブラー ज्याに

「そんなの…夕輝には関係ない！」

「ブランクがあれば誰だって悩むよ！」

「その夕輝君の心を利用するなんて…私、堪忍袋の緒が切れました
！！」

「フン、ほざいている。デザトリアン！プリキュア達を倒すぜよ！」

「うおおおおおお！」

デザトリアンが3人を倒そうと動き出したその時だった。

『ギャオオオオオン！』

突然大きな咆哮が響き、ブラッサム達は上を向いた。驚いたことに空に赤い龍が飛んでいたのだ。

「な、な、な、何ですあれ……！？」

「ド、ドラゴン！？」

「ウソでしょ……！？」

赤い龍は口から火球を放ち、デザトリアンに当たった。火球は見事に命中し、デザトリアンは倒れた。

「デザトリアンに攻撃した？」

「もしかしてあのドラゴン、味方なのでしょうか？」

デザトリアンに攻撃した赤い龍はどこかへ飛んでいた。赤い龍が飛んでいく同時に空から誰かが降りてきた。降りたのは赤い龍と同じ、赤い色で左手には龍と同じガントレットが着いていた。

「誰だい？君は？」

コブラー ज्याは警戒しながら彼に聞いた。

「俺の名は…『仮面ライダー 龍騎』…お前を倒すものだ！」

龍騎は自分の名を言い、コブラー ज्याとデザトリアンに指さした。

第8話 プリキュアとの出会い（後書き）

1週間ぶりの投稿です！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8600y/>

ハートキャッチプリキュア & 仮面ライダー龍騎 鏡の騎士と伝説の戦士

2011年12月18日23時47分発行